

指導者用デジタル教科書(教材)を活用した歴史授業 —資料で育む「歴史的な見方・考え方」—

沖縄県 浦添市立神森中学校 森田英樹

1 はじめに

新学習指導要領（平成29年告示）により、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善が示唆されました。改訂された社会科の目標から、生徒が自ら「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせるために教師はどのように授業を進めればよいかということが求められていると考えられます。「歴史的な見方・考え方」とは、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』（以下、解説）では、「社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差違などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連付けること」とされています。

今回は、生徒がこの「歴史的な見方・考え方」を働かせることができるように、指導者用デジタル教科書(教材)や資料集、アプリを活用する授業展開を紹介します。教師が生徒に見せたい重要な部分を切り取ったり線を引いて加工したりして用途に応じて資料を作成してできること、さらに、生徒がその資料に自分の考えを加えたりその場でズーム機能を使いながら視覚的に共有・確認したりできることが、指導者用デジタル教科書(教材)の最大の利点であると考えます。

ここでは、『帝国書院 指導者用デジタル教科書 社会科 中学生の歴史』（以下、デジタル歴史教科書）と『帝国書院 指導者用デジタル教科書 中学校社会科地図』（以下、デジタル地図帳）を使用します。

2 授業実践の例

単元：第5部・第4章 近代国家への歩み
2 沖縄・北海道と近代化の波

(1) 本時のねらい

江戸時代までと現在を結ぶ《近代》という時代を扱う単元では、明治政府が国家の近代化をどのようにめざしていったのか、どのような内政・外政を展開していったのかをとらえさせていきます。そこで、「明治政府の諸改革の目的」と「議会政治や外交の展開」に着目し、単元を貫く課題を「明治時代の政府や人々はどのような近代国家をめざしていたのだろうか」と設定し、明治政府の諸改革が政治や文化、人々の生活に与えた影響、世界との関係や現代の政治とのつながりを考察できるように単元を構成していきます。

本時のねらいとしては、解説p.113の『『領土の画定』では、ロシアとの領土の画定をはじめ、琉球の問題や北海道の開拓を扱う。その際、北方領土（歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島）が一貫して我が国の領土として国境設定がなされたことについても触れる』についてとらえさせていきます。

(2) 導入

前時の学習内容であるデジタル歴史教科書p.167の「④明治初期の日本の国境と外交」（図

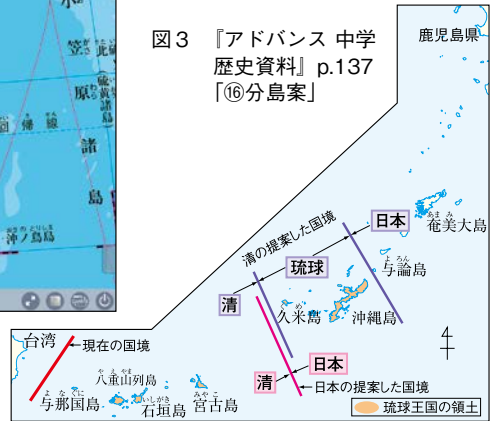


図1 デジタル教科書p.167 「④明治初期の日本の国境と外交」(「◎日本の国境」のクリックで、当時の日本の国境〔赤破線〕が表示される)



図2 デジタル地図帳p.33～34を使った自作資料

図3 『アドバンス 中学歴史資料』 p.137 「⑩分島案」



1) を提示し、「明治初期の国境」と「現在の国境」を比較させます。

発問①

「明治時代の国境と現在の国境とを比べてみて、気づいたことを発表しましょう。」

生徒の反応

- ・思っていたより現在と似ているところが多い。
- ・千島列島でのロシアとの国境線が現在と違う。
- ・清（中国）との間の国境線は今と同じだ。

発問②

「実は、このような国境になる前に、明治時代に清と日本との間で、南西諸島における国境についてそれぞれ提案がなされました。それは次のどこだと思いますか？」

ペンツールを使って1～5を記入したデジタル地図帳のページを電子黒板に表示し(図2), 「清が提案した国境線」と「日本が提案した国境線」をそれぞれ選んでもらいます。

- 1 現在の国境
- 2 八重山列島と宮古列島の間
- 3 沖縄諸島と宮古島の間
- 4 現在の沖縄県と鹿児島県の間
- 5 屋久島と口之島の間

次に、『アドバンス 中学歴史資料』 p.137の◎琉球「⑩分島案」(図3) から、清と日本の主張にズレがあることや現在の国境と違う点を確認します。

生徒の反応

- ・それぞれの国で主張する国境が違う。

・清の主張では、琉球王国がまだある。

・日本の主張が通って現在になっている。なにがあったのか？

資料(事実)と生徒の認識の間に「思考のズレ」を意図的に組み入れ、生徒の概念をゆさぶり、内発的に動機づけしていきます。

(3) 展開 1

導入で「国境」を意識させた後、明治政府が沖縄と北海道に行ったことを確認させます。

発問①

「では、明治政府が沖縄に行ったことを確認していきましょう。」

デジタル歴史教科書の授業スライドを活用して確認させます(図4)。マスク機能で隠している①～⑤を答えさせ、江戸時代から明治時代にかけての沖縄県の設置までをおおまかに把握させます。

年代	琉球(沖縄)と新政府の関係
江戸時代	幕府や薩摩藩の支配を受ける一方、清から国王が任命され、欧米諸国からも独立した王国として認められていた。
1872年	新政府は、(① 琉球藩) を設置しましたが、琉球は清との関係と王国を維持しようとし、清も(② 琉球藩の設置) を認めなかった。
1874年	台湾で琉球の漂流民が殺害される事件が起こると、新政府は(③) し、清から(④) を獲得した。
1879年	新政府は、琉球藩を廃止して(⑤ 県) を設置した。

図4 授業スライド4「琉球(沖縄)と新政府の関係」

発問②

「明治政府が北海道に対して行った政策をまとめてみましょう。」

デジタル歴史教科書の授業スライドを活用してまとめていきます。その際、地図中の屯田兵村や鉱山の記号などにも注目させます（図5）。



図5 授業スライド6「新政府が北海道に対して行った政策をまとめてみよう。」（①②をクリックすると、屯田兵村、炭鉱などのカコミを表示できる）

（4）展開2

展開1をふまえ、明治政府がどのような近代化政策をめざしたのかをとらえさせます。

発問①

「明治政府は、どうして沖縄と北海道にこのような政策を行ったのだろうか？（目的）」

今回は、授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」にあるシンキングツール（ベン図）を活用して、明治政府が「沖縄」「北海道」に行ったことから、「明治政府が沖縄と北海道に行った政策の目的はなんだったのだろうか？」と課題を発し、本時のねらいにせまります。このデジタルシンキングツールを使い、明治政府が、「琉球」

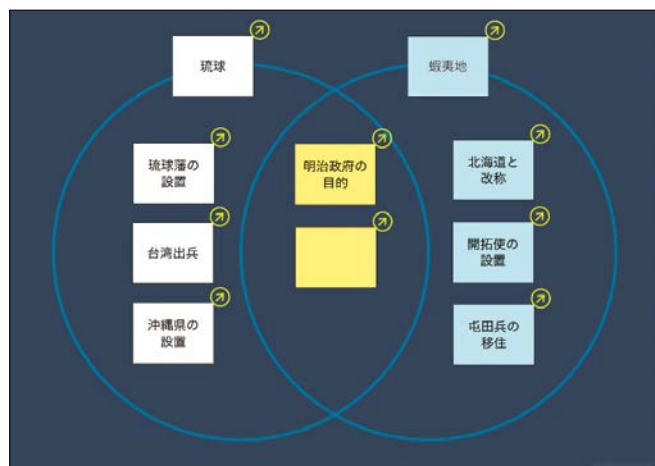


図6 「ロイロノート・スクール」（株式会社LoiLo）のシンキングツール（ベン図）を利用し、「琉球」と「蝦夷地」への新政府の政策を可視化して考えを促す

と「蝦夷地」に対して行ったことを可視化することで、生徒が説明や理由づけをしやすいうにしています（図6）。そして、グループで話し合った結果を全体で発表し、共有します。

生徒の意見

- ・北海道と沖縄は国境となるため、日本の領土であることを確定させたかった。
- ・領土を少しでも広げるためには、北海道と沖縄が日本の領土であることを、外国にアピールする必要があるから。
- ・琉球がかつて中継貿易で栄えたように、日本も中国やロシアと貿易をしたかったから。

「中継貿易…」のように、これまでに習得した内容を生かしたグループの意見も見られました。

発表の中には「将来は、ロシアと中国・東南アジアに進出して、少しずつ領土を広げたかったから。」と近代後半に日本が領土を拡大したこととつなげた生徒もいました。また、「明治政府は、沖縄と北海道の近海に豊富な水産資源や鉱山資源があると思っていた。」と地理的な視点から資源に注目している生徒もいました。

3 さいごに

教師が与える視覚的情報と生徒がもつ情報・知識を頭の中で「つなげる」際の過程や発問に

答えるための「つなげる作業」が「歴史的な見方・考え方」であると考えます。それは、課題に即した教師の問いかけと資料提示によって、さらに育まれていくものであると思います。

教科書では文字数の制限から、社会的象徴の理由や目的も簡潔に述べられているため、詳細は記述されていないこともあります。授業の資料から、「本当は〇〇だったかもしれない。」と想像を膨らませ、思考させることは、生徒にとって歴史学習の魅力の一つでもあると思います。